

2023年度・第66回J C J賞贈賞式プログラム

2023年9月23日(土) 13時開会 16時30分終了予定
於：全水道会館 4階大会議室
司会 谷岡 理香

開会挨拶 藤森 研 (J C J代表委員)

記念講演 雨宮 処凛さん (作家・活動家)
聞き手 鈴木 耕

J C J賞贈賞式

J C J賞選考過程と講評 上西 充子 (J C J賞選考委員)

贈賞

【J C J大賞】 1点

- 鈴木エイト『自民党の統一教会汚染 追跡 3000日』
『自民党の統一教会汚染2 山上徹也からの伝言』 小学館

【J C J賞】 5点 (順不同)

- 「台湾有事」の内実や南西諸島の防衛強化を問う一連の報道 琉球新報社
- 小山美砂 『「黒い雨」訴訟』 集英社新書
- 「命(ぬち)ぬ水(みじ)〜映し出された沖縄の50年〜」 琉球朝日放送
- 「市民と核兵器〜ウクライナ 危機の中の対話〜」 NHKEテレ
- 「ルポ死亡退院〜精神医療・闇の実態〜」 NHKEテレ

受賞者スピーチ

- 鈴木エイト さん (ビデオメッセージ)
- 琉球新報社 池田 哲平 さん
- 小山美砂さん
- 琉球朝日放送 島袋 夏子 さん
- NHK 青山 浩平 さん (ビデオメッセージ)
- NHK 岡田 亨 さん

閉会挨拶 古川 英一 (J C J事務局長)



2023年度 第66回

J C J 賞

すぐれたジャーナリズム活動を 顕彰します。

贈賞式:9月23日(土) 13:00~

全水道会館 4階 (東京・水道橋)

13:00	開会
13:10	記念講演
14:00	講評
14:10	贈賞式
15:20	受賞者スピーチ
16:30	閉会 (予定)

一人ひとりが、ジャーナリスト。

主催:日本ジャーナリスト会議 <JCJ>

〒101-0061 東京都千代田区神田三崎町3-10-15富士ビル501 TEL03-6272-9781

【ご挨拶】

現場をコツコツと回り、多くの人たちの小さな声に耳を傾けていく。政府など権力を持つ立場の言質を鵜呑みにするのではなく、それを疑い、検証していく。そうした地道な活動を続けてきたジャーナリストの人たちが、JCJ賞の受賞者としてこの場に集まりました。

66回目となるJCJ賞には大賞を含め6つの作品が選ばれました。政党と宗教団体の癒着、終わりの見えないウクライナ戦争と、軍拡へとひた走る国の政策への地方の叫び、弱い立場の人々が社会の中で疎外されていく現状、一つひとつの作品が浮かび上がらせるのは、まさに私たちがいまを生きる、この日本・世界の姿だと思えます。

ジャーナリズム・メディアへの不信を多くの人たちが口にします。メディアが権力批判に及び腰で、横並びの報道ばかりといった指摘も受けます。だからこそ、多くの人たちに今回の作品を読み、視聴してもらいたいと思います。きっとジャーナリズムの持つ底力を知ってもらえることでしょう。受賞者の皆様のさらなるご健闘にエールをお送りいたします。

2023年9月23日 日本ジャーナリスト会議〈JCJ〉 事務局長 古川英一

2023年度JCJ賞贈賞作品一覧

【JCJ大賞】 1点

● 鈴木エイト 『自民党の統一教会汚染 追跡3000日』

『自民党の統一教会汚染2 山上徹也からの伝言』 小学館

安倍晋三元首相が銃撃されて死亡してからまもなく1年になろうとしているが、『追跡 3000 日』は安倍氏暗殺からわずか 3 か月足らずで刊行された緊急出版であり、それまでメディアからほとんど注目を浴びることがなかった著者初の単著である。

著者が信者による偽装勧誘の現場に遭遇し、被害者の救出活動をはじめたのをきっかけに統一教会というテーマに取り組むようになったのは2002年、以後20年にわたってフリージャーナリストとしてはほとんど唯一人、統一教会問題、とりわけ自民党とのかかわりを身の危険を顧みない勇敢な取材活動に集中してきた。『追跡 3000 日』は、おもに2013年以降の閣僚も含む自民党国会議員や秘書、統一教会関係者への取材をドキュメントタッチで描き、綿密な調査で明らかになった自民党の「汚染」の実態を暴いていく。『山上徹也からの伝言』では狙撃犯の山上徹也と著者がツイッターでの接点があったことが明かされ、統一教会の被害者である彼の行為とその背景を、多様な視点でとらえようと試みている。

統一教会問題は、安倍氏暗殺事件から1年足らずでメディアでの追求・取材も激減、早くも雲散霧消しかねないありさまだ。そのようないまこそ、孤独な闘いを続けてきたフリージャーナリストの活動をたたえたい。

【JCJ賞】 5点（順不同）

● 「台湾有事」の内実や南西諸島の防衛強化を問う一連の報道 琉球新報社

「台湾有事」を煽り立てることで、日本国憲法の「専守防衛」を逸脱した、軍拡路線を強硬に進める岸田政権。その最前線に立たされる沖縄が、再び戦場と化される危機が迫っている。危険な野望の基礎となる「安全保障関連3文書」の取材を、全社挙げて続けてきた琉球新報が、南西諸島への部隊・ミサイル配置の計画はじめ、離島での戦闘を前提にした日米の軍事戦略などのスクープ、住民無視の防衛強化の実態を、多面的・重層的に浮き彫りにしている。「戦争か平和か」という重

大な選択を迫られている日本国民に、警鐘を強く鳴らす大作である。

● 小山美砂 『「黒い雨」訴訟』 集英社新書

著者は特に2019年秋から毎日新聞の原爆報道キャップとして「黒い雨」訴訟を取材・研究・報道をしている。著者は「黒い雨」訴訟を中心軸に据えて、何故戦後75年余りもの間置き去りにされてきたのか、提訴したのは何故か、「黒い雨」の実態、選別された被爆者の現状、裁判の経過、地裁・高裁判決は何を意味するのか、そして残されている課題は何かを追究した。此の著書は、日本の被爆者運動全体の歴史を含むいわば壮大と言っていい「黒い雨をめぐる被爆者運動の俯瞰図」をまとめた初めてのドキュメントである。

被爆者運動、核廃絶運動が直面している壁は大きい。今現在、先制使用を公言して核の脅しを強める核先進国は核戦争の危険を否認なしに強めている。だからこそ、著者が、あらゆる被ばく者の切り捨ては続いているが黒い雨訴訟での成果を前進させ、もっと長崎へ、もっと原発被害の福島へと運動を広げていく期待を語っている事は貴重だ。

● 「命(ぬち)ぬ水(みじ)〜映し出された沖縄の50年」 琉球朝日放送

2016年、沖縄県は45万人の水道水源になっている川や地下水から、有害な化学物質・PFASが検出されたと公表した。戦前戦後と沖縄の人たちの命をつないできた地下水が使えなくなるといふ深刻な問題だ。しかも、未だに汚染を止めることが出来ない。汚染源とみられる米軍基地に立ち入り調査が出来ないのだ。そこにはまた、「日米地位協定」が立ち塞がっている。琉球朝日放送は英国人ジャーナリストと共同で「日米地位協定の壁」を乗り越えて調査報道を継続した。番組を英語に翻訳して、アメリカのハーバード大学ライシャワー日本研究所が共催し「アジア研究協会」などで上映した。PFASによる水質汚染は東京の横田基地周辺でも、問題が顕在化しており、各地で市民グループの運動が加速されている。

● ETV特集「市民と核兵器〜ウクライナ 危機の中の対話〜」 NHKEテレ

「核兵器が必要だ」。戦禍のウクライナで、市民の声が強まる。日本から帰国したボグダンもそう考える一人だ。ウクライナは1991年に独立し、94年には、米ソに次ぐ世界第3位の保有核兵器2000発を放棄する「ブタペスト覚書」に署名した。ボグダンの祖父パルホネンコはこの歴史的決断に、教育相として関与した。祖父はボグダンに「私たちは正しい決断をした。核兵器なしで独立を守る」と語っていた。核大国アメリカの中枢にいたペリー元国防長官が「パルホネンコの言うことは正しい」とコメントする。祖父の言葉の意味を確かめようと、ボグダンは前線の兵士や、農民、医師らと対話を重ねる。核兵器の無い世界へ、終わらない問いへの闘いが続いて行く。

● ETV特集「ルポ死亡退院〜精神医療・闇の実態」 NHKEテレ

2月15日、東京都八王子市の滝山病院を警察が捜索、患者への暴行の疑いで看護師を逮捕した。監督する東京都も調査に乗り出した。NHKは内部告発による院内の映像や音声記録を入手。番組は「うっせえ！ 殺すぞ!!」と患者に罵声を浴びせる看護師とみられる男性の声を伝える。「NHKですが」と記者がマイクを向けるが、無視して車で走り去る病院長。病院には1498人の患者が入院している。家族や病院関係者などへの取材から、「死ななければ退院できない」という病院の実情と背景が明らかになる。浮かび上がってきたのは、心の病を抱える患者たちを「お荷物」とみなす医療行政の構造だ。1年に及ぶ調査報道ドキュメント。